

## 学部・研究科等の教育に関する現況分析結果

学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）	1
1. 地域学部	3
2. 医学部	6
3. 医学系研究科	8
4. 工学部	11
5. 工学研究科	14
6. 農学部	16
7. 持続性社会創生科学研究科	19
8. 連合農学研究科	22
9. 共同獣医学研究科	24

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。



## 学部・研究科等の教育に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	教育活動の状況		教育成果の状況	
	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
地域学部	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
医学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
医学系研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
工学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
工学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
農学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
持続性社会創生科学研究科	【3】	高い質にある	【2】	相応の質にある
連合農学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
共同獣医学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある



## 1. 地域学部

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 …………… 4 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 …………… 5 )

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

### 〔判定〕 高い質にある

#### 〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

学生が地域住民や地域の行政に携わる人々から学ぶ「地域調査プロジェクト」（旧「地域調査実習」）という科目がある。地域創造コースの場合には、平成 26 年度から平成 28 年度は鳥取県琴浦町、平成 29 年度から令和元年度は鳥取県八頭町において、3 年間に渡る地域状況の多面的な現地調査を実施している。国際地域文化コースの場合には、鳥取県内外で地域と連携し、複数のグループに分かれて地域の文化調査を実施している。人間形成コースの場合には、科学的手法を用いて検証する能力、調査・分析、発表に関わる技能と態度を身につけることを目的として、地域に入り込んで多様なテーマの調査を行っている。

#### 〔優れた点〕

- 大学で「アカデミックな知」（「専門知」）を学びつつ、実践的な地域調査（実践科目等）や地域の実践者（学外講師）から得た「地域の知」を吸収し、「アカデミックな知」と総合して、教員と学生で再解釈・再構築して新たな知を創り、地域に還元して鍛え上げ、教育に活かすことを目指している（「知の循環」）。そのために第 2 期中期目標期間に刊行した地域学の理論書『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』（ミネルヴァ書房）に加えて、令和元年度に地域学を社会実装する『新版 地域政策入門—地域創造の時代—to』と『アートがひらく地域のこれから—クリエイティビティを生かす社会へ』（ともにミネルヴァ書房）を出版して、地域学教育のための基本書を整えた。
- 「地域調査実習」／「地域調査プロジェクト」では、学生たちは地域住民や地域の行政に携わる人々から学んでいる。地域創造コースでは、1 つの自治体に 3 年間入り込み、グループごとにくつものテーマを設定して多面的に調査をしている。平成 26 年度～平成 28 年度は鳥取県琴浦町、平成 29 年度～令和元年度は鳥取県八頭町と連携している。国際地域文化コースでは、4～5 グループに分かれて、地域の文化調査を実施している。平成 29 年度の場合、「移住」「台湾の文化」「鳥取の国際交流」「戦後鳥取のラジオドラマ」をテーマに鳥取県内外で地域と連携した。人間形成コースでは、「子ども食堂と子供の居場所」「多文化化する地域社会で誰が何を学ぶのか」「子どもたちとの交流を通して中山間・過疎地域の教育を考える」等、多様なテーマを設定して、地域に入り込んで科学的手法を用いて検証する能力、調査・分析、発表に関わる技能

と態度を身につけることを目指している。地域学部のこのような取組は、しばしば報道機関に取り上げられている。

**分析項目Ⅱ 教育成果の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

## 2. 医学部

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 …………… 7 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 …………… 7 )



## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 医学科では夏と秋に開催するオープンキャンパスにおいて、進学希望者を対象とした学科説明会と施設見学を継続して実施している。平成28年度は延べ714名、平成29年度は延べ811名、平成30年度は延べ898名、令和元年度は延べ1,041名の参加があった。
- 医学科では、海外協定大学との交換留学及び訪問研修生受入実績として、平成28年度の受入7名、派遣0名から令和元年度の受入9名、派遣5名へ増加している。また、保健学科看護学専攻では、海外協定大学への英語研修等への参加が平成28年度は4名、平成29年度は5名、平成30年度は9名と増加している（全学で実施している鳥取大学 Global Gateway Program も含む）。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

### 3. 医学系研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況	.....	9	)
( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況	.....	10	)

**分析項目 I 教育活動の状況****〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

教育活動の基本的な質を実現している。

**〔特色ある点〕**

- 卒・修了生からの寄附金を原資として、学生の成功体験に資する主体的・自発的発案に対してこれを支援する「出る杭を伸ばす医学生支援プロジェクト」を平成 30 年度より立ち上げている。臨床心理学専攻の学生による提案プロジェクト「子育てぐんぐんプロジェクト」が平成 30 年度に採択された。本プロジェクトは、発達障がいまたはその疑いのある子どもを持つ保護者を対象に、鳥取大学方式のペアレント・トレーニング・プログラムを実施するものであり、計 150 千円の支援を受けている。
- 医学専攻では、AMED 次世代医療機器連携拠点整備等事業の採択を令和元年度に受けて、「山陰から全国へ」展開可能な地域密着型医療機器開発拠点の展開プログラムを開始した。「越境」というキーワードを軸に社会人向けに医療機器開発人材育成共学講座の一環として、企業・医療・金融・行政及び学生等の様々な経歴を持つ人からなるチームを結成し、医療ニーズの探索から製品企画までの道のりをチーム全体で経験する「共学講座」を開講している。令和元年度からは受講者のレベルに応じた多様なコース設定を新たに取り入れ、基礎コースに相当する「発心コース」と、学びをより進めたい受講者向けのアドバンスト（発展）コースとして「雲水コース」を開設している。「発心コース」は、勉強会と臨床現場見学会から構成され、令和元年度は計 3 回（9 月 27 日 30 名、12 月 12 日 22 名、2 月 7 日 27 名）開催している。参加登録機関は 49 機関であり、延べ 79 名の参加者があった。発心コースの第 1 回目では、鳥取大学発ベンチャー企業の最高戦略責任者の講義を行っている。また、臨床現場見学会として附属病院放射線部の見学を行い、様々な医療ニーズを抽出している。参加者は 43 名（企業 21 社 32 名、オブザーバー 8 機関 12 名）であった。「雲水コース」は、職種や専門性の異なる参加者がチームを組んで、フィールドワークを通じて参加者自らが取り組みを進めることを目的とした、医療機器開発に必要なスキルを身につけるワークショップを行い 10 名の参加があった。雲水コースの第 1 回目では、「人とチームの理解」と題して 3 名一組のチーム（計 2 チーム）で Will-Can-Must フレームワークを用いたワークショップを実施している。参加者は 6 名（企業 3 名、行政 2 名、金融 1 名、医療 4 名、計 10 名）で

あった。

**分析項目Ⅱ 教育成果の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

## 4. 工学部

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 ..... 12 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 ..... 13 )

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

### 〔判定〕 相応の質にある

### 〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

### 〔特色ある点〕

- 工学部独自の海外派遣プログラムとして、学部学生及び博士前期課程学生を対象とし、ライス大学（アメリカ）での研究インターンシップ（約2か月～1年）、ウォータールー大学（カナダ）での入学体験プログラム（9月 約10日間）、サイモンフレイザー大学（カナダ）での短期研修（研究型）プログラム（約2か月～1年）を実施している。参加学生による留学報告会を開催しており、参加学生のみでなく、その他の学生も触発され、TOEICのスコアアップ等語学力の向上につながっている。
- 女性専用リフレッシュルームや実験・演習室などを開放し、自学自習が出来るようにしている。
- 平成25年度から平成28年度にかけて、TOEICで600点以上の成績を得た学生数が6名から20名へ大きく増加し、その後も一定値をほぼ維持している。年度別の学部目標値を毎年度クリアしており（平成28年度目標値15名、実績値20名）、鳥取大学で取り組んできたグローバル人材育成教育の効果が最も現れている。
- 工学部では、秋のオープンキャンパスに合わせて、平成28年度から女性教員の会の主導で女子中高生のための工学部説明会「TottoriTech Girl」を実施している。平成28年、平成29年、令和元年の工学部進学希望者の参加数はそれぞれ19名、21名、18名、また、協力者として参加した学部・大学院の女子学生数はそれぞれ19名、20名、8名であった。進学希望者及び同伴者と女子学生・大学院生が、工学部での勉学のみならず学生生活全般について情報交換することにより、工学部進学について中高生が抱えている疑問や不安を解消することができたとの感想が寄せられている。懇談会では、女子学生がキャンパスライフの紹介（学習、研究、日常生活、進路など）を行うことで交流を深めた。これを契機にして、機械系に対して従来からある、きつい、油まみれといったイメージから全国的に女子学生比率が低い現状を鑑み、機械物理系の女子学生や卒業生の動向を伝え、また、様々な疑問や悩みを解消するため機械物理系の女子在学生や卒業生で組織する『鳥大メカジョ連絡会』を平成29年秋に結成した。この連絡会は、年に2回程度開催しており、例えば、平成29年度は学部の上級生

が下級生に対して、研究分野、内容概要の紹介を行い、学習や進路のモチベーション向上を図る報告会を開催した（参加者 23 名）。令和元年度は各自の自己紹介、大学院生からの研究概要紹介、授業の取り方・勉強方法、就活体験記の発表等があり、メンバー同士は SNS でつながりを持ち相互に連絡を取り合っている。

- ものづくり教育実践センターでは、「ものづくり実践プロジェクト」及び「実践プロジェクトⅠ・Ⅱ」を開講し、地域の企業と協力して新製品の開発と試作に取り組むなどの実践的な教育活動に取り組んだ。平成 30 年度は「子供向け IoT プログラミング教材の開発」や「先端ディスプレイ技術を用いた製品開発」などの特徴的なテーマを扱った（受講生数：計 29 名）。その結果、「光合成について学べる環境センサモジュール」や「太陽と月の運動について学べる動く模型」などのユニークな教材試作を完成させた。受講生グループの一部は製作した試作品を「第 60 回鳥取県発明くふう展」に出展し、鳥取県商工会議所連合会会長賞および鳥取県商工会連合会会長賞を受賞するなど高評価を得た。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

〔特色ある点〕

- 社会システム土木系学科や電気情報系学科では、就職に有利に働く資格取得のための講習会や模擬試験を学科独自で行っている。例えば、電気情報系学科では、令和元年度に第 2 種電気工事士技能試験の講習会を 6 月に 2 回、7 月に 7 回、10 月に 4 回、11 月に 9 回、12 月に 3 回行った。その結果、13 名が受験し、12 名が合格した（合格率 92.3%）。ちなみに、2018 年の合格率（全国平均）は 67.5%であった。

## 5. 工学研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 ..... 15 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 ..... 15 )



**分析項目Ⅰ 教育活動の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

教育活動の基本的な質を実現している。

**〔特色ある点〕**

- 工学研究科では、学生による授業評価アンケートの結果、改善が必要であると思われる教員に対して研究科長等が面談を行い、授業評価結果をフィードバックするなどの助言・指導を行った。

**分析項目Ⅱ 教育成果の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

## 6. 農学部

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況	.....	17 )
( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況	.....	18 )

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

### 〔判定〕 相応の質にある

### 〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

### 〔特色ある点〕

- COC+「学生参加型の産官学連携共同研究」支援事業に、平成 29 年度は生命環境農学科から 5 件、平成 28 年度は生物資源環境学科及び共同獣医学科から各 1 件が採択され、学生が主体となり地域、企業の課題解決のための共同研究を PBL 形式を用いながら実施した。
- 生命環境農学科では、募集人員に占める面接試験を課す入試方法の募集人員の比率が 38%を越え、多面的評価につとめている。各募集方法で求める人物像に適合した選抜を行うために、面接業務を担当する教員を対象として平成 22 年度（改組前の生物資源環境学科時）より面接委員研修会を実施している。生命環境農学科教員のうち、研修会に参加した者の比率は 95%であり、ほぼ全教員が研修会を受講している。また、入試方法、募集方法別に求める人物像に適合した志願者を選抜できるように、面接シートの改善をはかっている。
- 農学部では、グローバル人材養成のための海外専門教育プログラムとして「国際乾燥地農学実習」（生命環境農学科）、「台湾東海大学海外実践プログラム」（生命環境農学科）、「東南アジア熱帯域における菌類科学フィールドワーク」（生命環境農学科）、「英国・ケンブリッジ大学との獣医学臨床研修プログラム」（共同獣医学科）を実施している。参加者数は平成 28 年、平成 29 年、平成 30 年で 41 名、44 名、40 名とほぼ一定となっている。
- 農学部は平成 29 年度に、国家戦略・プロフェッショナル検定のひとつである食の 6 次産業化を担う人材としての「食の 6 次産業化プロデューサー」資格（レベル 3）の認定に係る育成プログラムを、農学部で開設する授業科目（計 16 単位）により構成した。

**分析項目Ⅱ 教育成果の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

**〔特色ある点〕**

- 生物資源環境学科の卒業時の学生へのアンケート結果から、生物資源環境学科に入学したことに対する満足度の肯定的回答（「大変満足」及び「ある程度満足」）は、概ね毎年90%以上であった。

## 7. 持続性社会創生科学研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 ..... 20 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 ..... 21 )

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

### 〔判定〕 高い質にある

#### 〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

国内外の研究機関と連携し、講義で学んだ乾燥地に関する諸問題を海外の現場において体験する「海外実践演習」を開講している。

また、菌類きのご資源科学に特化したプレ博士課程となる留学生及び日本人学生が共修するための特別プログラムである「菌類きのご資源利用科学特別プログラム」等の特色ある取組が行われている。

#### 〔優れた点〕

- 外国の現場で活躍できる実践的な能力を養成するため、工学専攻では「国際連携特別研究」、国際乾燥地科学専攻では「海外実践演習」を開講している。「海外実践演習」は、外国の現場で活躍できる実践的な能力を養成するために、講義で学んだ乾燥地の諸問題を海外の現場において体験し、その解決のために行われているプロジェクトの仕組み、技術要素、問題点等を、現地の研究者・技術者からの解説及び農民・住民との議論を通じて体得する演習科目で、国際乾燥地農業研究センター（ICARDA）との連携により行われており、平成 30 年度はモロッコで実施した。

#### 〔特色ある点〕

- 国際乾燥地科学専攻では、国内の農業研究機関と連携して日本の先進的な研究現場において講義や演習を行う「国内実践演習」、乾燥地科学分野で世界をリードする海外研究機関と連携して、講義で学んだ乾燥地の諸問題を海外の現場において体験し、その解決のために行われているプロジェクトの仕組み、技術要素、問題点等を、現地の研究者・技術者からの解説及び農民・住民との議論を通じて体得する「海外実践演習」を開講している。
- 積極的に留学生を受け入れるために、農学専攻では令和元年 10 月から「菌類きのご資源利用科学特別プログラム」を実施しており、世界的に類を見ない菌類きのご資源科学に特化したプレ博士課程となる留学生及び日本人学生が共修するための特別プログラムである。また、授業を英語により共修させるプログラムとなっており、外国人だけではなく、日本人学生の国際化にも役立っている。本プログラムの令和元年 10 月入学者は 5 名（国費留学生 2 名、私費留学生 2 名、日本人学生 1 名）であった。

**分析項目Ⅱ 教育成果の状況**

**〔判定〕 相応の質にある**

**〔判断理由〕**

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

## 8. 連合農学研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況	……………	23 )
( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況	……………	23 )



## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 1年次の必修科目として科学コミュニケーションⅠ、2年次の必修科目として科学コミュニケーションⅡを開講している。これら科目は、3構成大学の学生が、3日間にわたり一堂に会して研究交流する科目であり、構成大学及び他機関の教員等の協力の下に、共通の講義を聴き、各学生による研究計画内容のプレゼンテーション、ポスター発表、そして交流会を通じて、広い視野と研究発表・意識伝達能力、表現能力を養っている。加えて、他の学生の研究発表内容を聴き、質疑・応答することによりお互いが議論できる能力を育むことによって、研究方法・論文作成、課題探索能力の向上、創造性を養うことを実践している。なお、特別講義、研究発表など全日程はすべて英語で行っている。
- 学生のキャリア形成への啓発として、在籍博士学生を授業・実習のティーチング・アシスタント（TA）に採用し、教育指導する訓練の機会を提供している。また、主指導教員の日々の研究補助として、博士学生をリサーチ・アシスタント（RA）に採用している。TA/RA制度は、共に限られた予算状況から、1年次学生に手厚く配分しているが、RAについては平成26年度から、2年次以上の優秀学生を対象に連合農学研究科の予算を別途確保し、「特別 RA 制度（RA plus）」を設けていたが、平成31（令和元）年度から対象を全学年として RA plus 制度を改正し、優秀な博士学生への経済的支援を拡充させた。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

## 9. 共同獣医学研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況	.....	25	)
( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況	.....	25	)

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 昨今の獣医学に対する期待や社会的養成に鑑み、高度な専門性と国際性を備えたスペシャリストとして、「家畜衛生・公衆衛生スペシャリスト」、「One Health スペシャリスト」又は「難病治療・創薬スペシャリスト」を養成することを教育上の特色としている。
- 鳥取大学共同獣医学研究科とインドネシア・アイルランガ大学獣医学部は、両大学間の教育と研究分野における学術交流及び協力を促進することを目的に学術交流協定書を締結すること、加えて、本学術交流協定に基づく学生の交流に関する覚書を交わすことの合意に至り、令和2年3月6日に研究科長が、また、同年4月2日にアイルランガ大学獣医学部長が協定書及び覚書に署名した。これにより、両大学の学生をそれぞれ相手側大学に留学させること、受け入れ学生が取得した単位を当該学生の正式単位として互換すること、研究実績の認定等が可能となった。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。